

目 次

挨拶（金沢大学社会貢献室長）	1
挨拶（穴水町町長）	1
話題提供 1	3
話題提供 2	5
話題提供 3	7
意見交換会	10
挨拶（金沢大学社会貢献室長）	21
資料1：日程・プログラム	22
資料2：アンケート結果	23

金沢大学と地域をつなぐ タウンミーティング

金沢大学が地域に果たす役割を考え「地域に開かれた大学」を目指して、平成14年度以降、地域住民と語る場として「タウン・ミーティング」を実施してきました。ざっくばらんな意見交換をととして地域活性化への具体的な連携のあり方を探ります。

参加無料

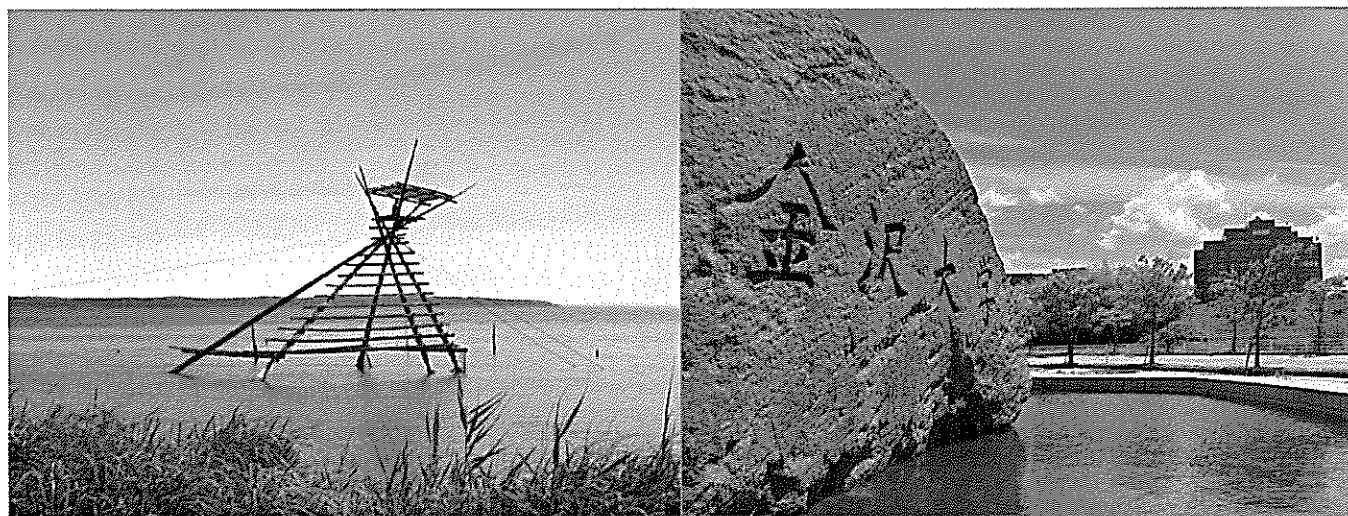
in 穴水

テーマ：震災復興から始まるまちづくり

日時：2007年12月4日(火) 18:30～21:00

会場：穴水町商工会 2階 研修室 (鳳珠郡穴水町字川島25-1)

参加申込みは必要ありません。当日、ご来場下さい。



主催：金沢大学 共催：穴水町、穴水教育委員会

お問い合わせ先：金沢大学社会貢献室 〒920-1192 金沢市角間町 TEL076-264-5290

金沢大学タウンミーティング in 穴水

テーマ ～震災復興から始まるまちづくり～

日時 平成19年12月4日(火) 18:30～21:00

場所 穴水商工会 2階 研修室

挨拶

中西 孝 (金沢大学 社会貢献室長)

地域に開かれた大学を目指して

金沢大学は地域に開かれた大学を目指していろいろな取り組みをしています。このタウンミーティングは、大学と地域の皆さまとのタイアップによって、大学がもっている情報を駆使し、それぞれの地域の課題を解決できないか、知恵、アイデアを出せたらいいなという趣旨で開いてきました。

今回のタウンミーティングは7回目になります。この穴水町のタウンミーティングのテーマは「震災復興から始まるまちづくり」です。今年(2007年)3月25日に能登半島地震があり、穴水町も被害を受けられました。復興の途上、あるいはこれまでの活動の中でいろいろな問題などがあつたと思います。率直に地域がどういうことに困っているのかというようなお話を伺い、大学としてそれに対して何かアイデアを出して、支援ができればいいなと考えています。

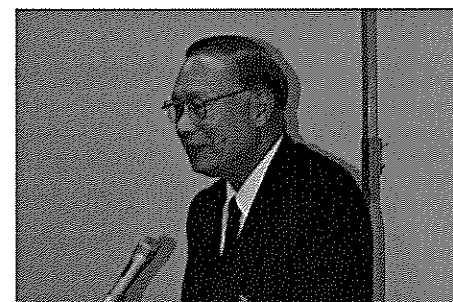
皆さんからいろいろな意見を出していただくことが唯一、本日のタウンミーティングを意味あるものにするのです。本日は3件の話題提供をしていただき、その後、意見交換の時間を設けてあります。忌憚のないご意見等をおっしゃっていただけたらと思っておりますので、どうか本日はよろしくお願いいたします。

挨拶

石川 宜雄 (穴水町町長)

震災をバネによみがえる穴水町をつくろう

3月25日の能登半島地震において、当町では全壊家屋220戸、半壊が約200戸、一部損壊が3000戸と、町のほとんどの世帯が被災するという大変な状態になりました。本町では復興に向けて、単に復旧するというだけでなく、新たな視点で町を再生するという創造的な復興を目指しています。今、「安心・安全」「活力再生」「人材育成」の三つをキーワードに、「震災



をバネによみがえる“あなみずまち”をつくろうということで一丸となっています。町では、平成20年度から5カ年間の復興計画を策定し、10月にその素案を町民の皆さまにお示ししました。今後も町民の方々の意見を最大限に取り入れて、ともに町の復興に取り組んでまいります。

本日のこのタウンミーティングが実りある会合となりますことをお祈りし、ご挨拶とさせていただきます。

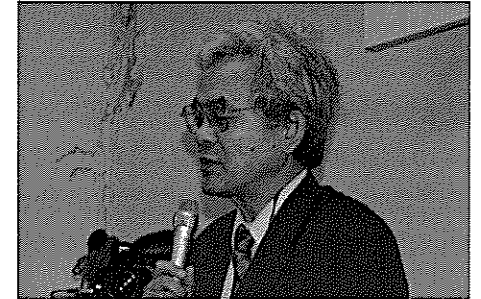


話題提供1 「震災と減災－能登の課題－」

北浦 勝（金沢大学 教授）

はじめに

自然災害には、地震、火山、地すべりといった地盤災害、台風、火山、洪水といった気象災害、バッタやイナゴの大量発生といった動物災害があります。また、日本では1年間に平均200人弱の方が災害で亡くなっておられます。その内訳は、地震が10%、台風が18%、豪雪が22%、豪雨が45%と、日本では気象災害で亡くなる方が極めて多いのです。



さらに1年間の被害額は、阪神淡路大震災での10兆円という大きなものを除きますと、平均で1兆円ぐらいです。その内地震は4%ですが、台風が24%、豪雪が9%、豪雨が32%と、気象災害による被害額が大きいのです。

防災（減災）の3本柱と緊急地震速報

自然災害を防ぐという意味で「防災（減災）の3本柱」というものがあります。一昔前までは自然災害を防ぐ「防災」といつていたのですが、今は災害を減らす「減災」ということがよくいわれています。

3本柱の一つ目の柱は「未然防止」です。地震が来る前にできることをいろいろやっておく。例えば耐震診断、耐震補強などです。2本目の柱「拡大阻止」は、火事が発生したら、その被害がさらに広がらないようにするという事です。3本目の柱「早期復旧」は、できるだけ早く住宅を直して、復旧・復興するという事です。

最近、「未然防止」と「拡大阻止」の間に、「緊急地震速報」というものが現れました。地震が発生したときには二つの波が来ます。最初に来る速い方の波であるP波をつかまえて、次に来るS波の大きさを予想し、直ちにNHKや民間放送を通じて住民の皆さまにお知らせする。P波が来て、S波が来るまでの10秒間ぐらいに何ができるかをあらかじめ考えておいて、その対策をとれば少しぐらいは助かるというものです。能登半島地震のときにも緊急地震速報は発表されましたが、穴水では地震速報の前に地震の波が来てしまいました。

地震帯と活断層

日本は世界でも有数の地震国です。日本列島の近くでは、太平洋からの大きな岩の塊（プレート）と、中国やロシアが乗っているユーラシアプレートが押し合いへし合いして、その間に北からアメリカのプレート、南からフィリピンのプレートが来ています。そういうプレートが日本の下で押し合いへし合いしているので、これはもう大変なことです。こういうところでは規模の大きな地震が発生します。

この押し合いへし合いの力は日本列島の中にも及んでおり、そのエネルギーは必ず活断層というところで解放されるので、活断層をきちんと調べておく必要があります。ただ、活断層にも確実度というものがあるって、確実度Ⅰは専門家が確実に活断層だと認めるもの。確実度Ⅱは、

確実度Ⅰと判定するには決定的な資料に欠けるもの。確実度Ⅲは単なる崖かもしれないというものです。陸の上の活断層でさえこのような状態ですから、まして海にある活断層は分かりにくいのです。

穴水付近にはたくさんの活断層がありますので、活断層が動かないという保証はありません。能登半島地震の場合は、二つの活断層のどちらかが動きました。しかも、能登半島地震の際に動いた二つの活断層は確実度Ⅲで、崖かもしれないというものが動いたのです。穴水付近には崖かもしれないものが他にもたくさんありますので、また動くかもしれないということです。

北陸の地震と能登半島地震

1964年の新潟地震では液状化が話題になりました。1983年の日本海中部地震では津波が発生し、能登にも津波が来ました。2004年の新潟県中越地震では67の方が亡くなり、全壊家屋は3175棟。2007年の新潟県中越沖地震では全壊が1244棟で、11の方が亡くなっているのです。

能登半島地震の場合は1人死亡、全壊家屋は638棟です。亡くなった方には本当に気の毒ですが、どちらかというと少ない被害で済みました。要するに能登半島地震の場合、家はたくさん壊れたけれども、亡くなった人の数は少なかったのです。

その理由として挙げられるのは、雪国ですので柱や梁が太い。しかしこれは新潟も一緒です。もう一つは、能登には独特の伝統工法があって、壊れても空間ができるように作られているのではないかという事です。確かに総持寺の前の辺りや穴水の駅前もそうでしたが、本当にラッキーなことに、壊れても空間ができるような、逃げ出せるようなところがありました。

また、能登にはお年寄りの方が多いのですが、元気な方が多い。天気の日には外に出る。さらに門前町は皆さんが家の外で雪割草まつりの準備をしておられたということで、ラッキーなことも重なったのです。

門前町の被害が少なく済んだということに関して、北國新聞にこんな記事が出ていました。「門前は7800人のうちの47%が高齢者。10年以上、行政と民生委員が福祉防災台帳の更新を続けていた。その結果、5時間以内に高齢者の安否確認が全部取れた」。これはすごいことだと思います。

このように地域の結び付きが大きいことが、比較的小さな被害で済んだということと結び付いているのではないかと。しかし、最近は個人情報の関係で自分の家のことをおっしゃらない方もいます。その場合にはとにかく分かる範囲でやるしかない。

応急復旧も早かったと思います。阪神淡路大震災のときは、その日にはほとんど何もできなかった。能登の場合、その日から重機が動いていましたし、当該自治体の立ち上がりなども極めて早かった。ボランティアの人も割と早くから来ていました。

災害軽減に向けて

災害を減らすためには、先ほどの3本柱をうまく活用するという方法があります。もちろん未然防止が一番重要です。耐震診断、耐震補強をすれば県や自治体から補助が出るのですが、一般の方々には分かっただけないというか、地震が来なければお金の無駄遣いということになりますので、なかなかやっていただけない。

次は緊急地震速報を活用して、地震速報が出れば、できるだけ速やかに地震の被害に遭わないようにする。お年寄りやけがをしておられる方、身体に障害のある方のことはあらかじめ考

えておく必要があります。

また、地震保険は絶対に入った方がいいのですが、入ったからといって家は強くならないので、それに加えて耐震診断、耐震補強をする。

それから、防災袋を用意しておく。防災袋には水などいろいろなものを入れておけばいいのですが、日ごろ使っている常備薬を入れておく必要もあります。また、地域社会の連帯は言うまでもないことです。

住家復興と義援金

「能登の住宅復興は義援金でできないか」ということを考えてみました。土地代は考えません。夫婦のみの1階建てで、1棟1000万円くらいだとします。能登全体で全壊が638棟、半壊が1644棟でしたので、半壊を半分で済むとしますと、1460棟分のお金を用意する必要があります。1棟1000万円ですから、146億円が必要です。日本の人口は1億人ですから、みんなが146円ずつ寄付してくれればいいでしょう。穴水だけだと32円で済みます。

最近、石川県が出されたデータでは、木造2階建て25坪で1500万円の場合、県の支援制度や、バリアフリーとか、国の支援などがあって、1500万円のうち580万円さえ自分で出せば25坪の家を建てられます。地震保険に入っておけば、その分お金が入る。さらにみんなに義援金を出していただければ、すぐに解決します。

話題提供2 「穴水町商店街について」

吉村扶佐司（商店街振興会長）

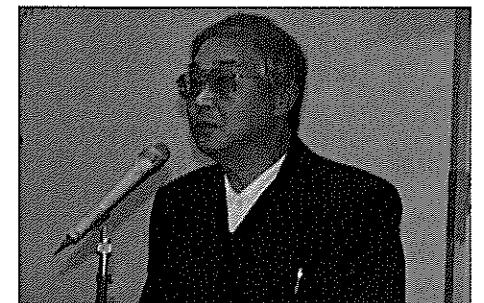
3月25日震災直後

穴水町は人口1万550人、3750世帯、高齢化率は35.9%です。われわれ商店街振興会は初めてのことをやろうと思いました。穴水といえば「かきまつり」、カキ貝の非常においしいところですので、カキ貝を使ってまちなかに人を呼び入れようということで、3月25日に予定し、1ヶ月ほど前から準備していました。

大きなテントをずっと並べて、10時からお客さんが来るので、火もたいて、すぐにカキ貝を焼けるように準備しておりましたら、42分、ドンドンという大きな音がして、次にガタガタガタガタとテントのパイプとパイプが触れ合い、何とも言えない音がして、何が起きたのか分からないという状況でした。ふと上を見ると、赤茶っぽいものがふわっと舞い上がりました。すぐ近くに土蔵があったのですが、それがゆっくりと壊れて落ちていくのです。地球の終わりではないかとも思いました。

われわれはカキ貝を1万個用意して「かきまつり」を準備していたわけです。この災害で、「このカキ貝をどうしようか」という思いも同時にありましたが、生産者の皆様のご協力を得て、何とかカキ貝は海にお返しすることになり、それでほっとしました。

しかし、テントや炉などの後片付けと同時にみんな自分の家も被災していますので、手伝いにも来ていただけないのは当然のことです。20日ほどかかってようやく片付いたかなと。しか



し、気が付けば1カ月ほどかかったのではないかという思いでした。

私の家も被害を受けました。店は鉄骨でしたが、住まいは木造で、揺れる速度か何かが違うのでしょうか。店と住まいがぶつかり合って、20センチばかり開きまして、現在、住宅はつぶしています。同時に、家の近くの川の護岸工事もしています。矢板を打っているのですが、下にたくさんの石があって水を止めることができないため、苦心しております。

復興サロンのスタート

行政からの後押しもあり、6月1日から「ふれあいサロン」を開催することになりました。毎週金曜日、商店主、住民の方、町内会長さん、少し離れた方にも寄っていただき、20～30人で復興についてずっと話を進めてきました。

そこで、人・物、総合管理、広報、情報といった四つの分野で話し合いました。特に広報ということになりますと、ワインやスイカ、カボチャ、ブドウといった特産物が穴水にあるぞという宣伝の仕方をしなければいけないのではないかと。また、人に対しては、井戸端会議ができるような、店の中でいつも2～3人が話し合いをしているような、そういう空間の余裕がある店や商店街にしていけばいいのではないかと。また、穴水には「峨山キリシマ」という大変きれいなキリシマがありまして、それを前面に出していこうではないかと。トイレは使いやすい場所に設置したらどうか。物に対しては、穴水は川を非常に意識しておりますので、川の風景、川での休息場所、川辺での散歩などを重視する。またカフェ・ローエルというイベントもやっていますので、カヌーで回遊できるような川にしていけばいいのではないかとということも話し合われました。料理に関しても、田舎料理ということで考え直したらどうかと。

総合管理に関しては、復興サロン、「穴水の未来を考える会」などの組織が維持し、明確にしていかなければならない。窓口がたくさんありそうで最後はみんな同じ人のところに行き着いてしまうのではないのではないかとということなども、話し合われてきました。

いずれにしても、震災前よりも穴水中心街が活発で、独自性のある穴水商店街であってほしい。「まいもんの里」ということを前面に出しているなら、うまくPRをしながら、もっとたくさんの「まいもん」の祭りができればいいなと考えています。

穴水商店街は来年からいよいよ本格的に活動します。12月の「広報あなみず」にもそのイメージが載っていますので、後でお持ち帰りいただければと思います。

まちなか再生に向けて

私たちは今の町よりももっと住みやすく、ゆとりがあり、ゆっくりとできる、会議では「じんのびな町、穴水町」ということを考えています。都会などでパソコンを使い、1分1秒を争うような仕事をした人たちが、穴水へ来たときにほっとするような、そういう「じんのび」なまちづくりも考えています。

今、観光というようなこともあるでしょうが、観光となる目玉が非常に少ないため、景色を見て、川を見て、ゆっくりとさせていただく穴水町、「じんのびな町」というようなことを目指しています。

川、にぎわい、憩い、コミュニティをキーワードに、これから私たちは頑張っていかなければいけません。ハードに関しては、県や国にさせていただき、私たちの意見も入れていくのですが、ソフトということになれば、私たちが一人一人の責任で、独自性のある商店街を一生懸命考え、自分の店を考えていかなければならないと思っています。

今はレジの機械が「ありがとうございました」と言うような時代ですが、私たちは自分の口から「ありがとうございました。今日どこ行ってきたんね。病院かいね、足湯かいね」と言うようなところから、この商店街を少しずつ盛り上げていければ幸いではないかと思っています。

話題提供3 神戸から穴水へ

鹿田 嘉博（神戸市職員労働組合副執行委員長）

なぜ穴水か

私たち神戸市職員労働組合は、能登地震が起こった3月25日の後、微力ですが、何とか早く復興していただきたいということでご支援してきました。義援金をお持ちしたり、子どもたちやお年寄りに神戸のお菓子を持ってお見舞いしたり、また、仮設住宅の皆さんのお見舞い、町の清掃、そして長谷部まつりのときに、龍獅團という、神戸の高校生で全国的に知られている龍の舞をやる生徒たちが来させていただくなど、そういう取り組みをさせていただきました。

よく町の方からも、なぜ穴水に神戸の組合が支援に来るのか、なぜ穴水なのかと聞かれるのです。そのことから少しお話ししたいと思います。そのために、神戸の大震災の話を少しだけしたいと思います。

震災で、神戸市内だけで4600人ぐらいの方が亡くなられたのです。私は東灘区に住んでおり、自分の家は半壊ぐらいで済んだのですが、たくさんの方が亡くなられました。私たちは役所の職員ですからすぐ出て、ほとんど10日、家族もほったらかしでいろいろな業務をやっていたのです。

そういう中で、本当に全国の皆さんからご支援をいただきました。私たちの仲間、労働組合の関係だけで、1月17日の震災から3月末まで延べ2万4000人来ていただいたのです。また100万人ともいわれる一般のボランティアの方に来ていただきました。本当にしんどいこともたくさんあったのですが、何とか皆さんと一緒に復興のために頑張ることができました。

こういうことは一生忘れません。何とか皆さんにお返しをしたいという思いをみんな持っています。全国のどこであっても、世界のどこであっても支援しようと、実際にこの13年間やってきました。インドネシア、トルコ、エルサルバドルといったところにも、ずっとカンパをしてきています。エルサルバドルでは、私たちのカンパで図書館や学校が建っています。

同時に、支援するときには一番困っているところに私たちが行こうというつもりでやってきました。この穴水にさせていただいたのも、マスコミもボランティアもみんな輪島に行く、門前町に行くというお話を、4月に来たときに聞いたのです。ぱっと見たら、穴水はそんなに被害は大きくないのではないかと。実は私も役場まで行くときにそう感じたのです。しかし、町の中に入ったら商店街を中心に被害が大きい。輪島へはたくさんの方が行っているのだから、私たちは穴水の皆さんを支援しようと。これは私たちの役割だと話し合い、そこから穴水の皆



さんを支援しようということになり、やってきました。

被災から社会貢献活動へ

私たちは被災地の支援ということだけではなく、社会貢献活動に発展させています。なぜ労働組合がと言われるのですが、本当に困っている人たちを助けていくことは、労働組合の原点だと思っています。

何をやっているかという、神戸は復興したといっても、中小のところはまだまだしんどいのです。そういうところで、学校へ行けなくなる方がいるのです。そこで神戸新聞厚生事業団と一緒に、組合員や職員からカンパを集めて「ひまわり援助金」という基金を作り、私立の高校生、各校1～2人と少ないのですが、学校へ行くための資金援助を5年間続けています。

また、神戸市内には障害者の皆さんのパン工房が四つあるのですが、震災でパンを買ってもらえなくなると。そこで私たちは1カ月に1回、組合の事務所の会議室をパンを売る場として提供して、昼休みに職員に買ってもらっています。自分たちが作ったものを買ってもらえるということで、皆さんすごく元気になれるのです。それを6年間続けています。

震災のときに本当に苦勞して、本当につらい思いをして頑張ってきた皆さん、また私たち自身もご支援をいただいた。そういうことに応えていく活動になるのではないかとということで現在進めています。

心の支援

これまで私たちが穴水の町で感じたことを何点か申し上げます。一つは、最初に私たちが来させていただいたとき、壊れた家から家財道具を搬出したり、仮設住宅に家財を入れるようなお手伝いなど何でもしますというお話をして、準備もしていたのですが、日程等の調整がつかなくて、最終的にはそういうお手伝いはできなかったのです。

どうしてかなとよくよく聞いてみると、町の皆さんは、自分たちのことは親戚、身内でやるのだと。それをよその人に手伝ってもらったら、親戚がいるのに恥ずかしいというようなお話も聞きました。その時、能登は地域や身内の絆が本当に強いのだなと感じました。

同時に、心のケアのようなこともすごく大事だと。私たちはそれを「心の支援」と呼んでいます。

私たちは新潟の中越地震があったときにも支援に行ったのですが、そのときに穴水町の役場の皆さんに「一緒に行きませんか」と声を掛けたところ、4名の職員の方が来てくれました。とりわけ穴水は復旧途上ですから、自分たちと同じような苦勞をされている皆さんが来てくれたということで、最初は元気がなくて、しんどいという感じだったのですが、話をして10～20分もたつと本当に明るい顔になって、しんどいところはあるけれども、最後は一緒に頑張りましょうというような話ができるのです。それは震災を経験した神戸であり、穴水であるからだと思っています。

そういう面で、心の支援、心の復興をやれるのが私たちであり、穴水の皆さんであると思っています。

人のにぎわい

二つ目に、生活の復興と経済的な復興は不可分な問題だと思います。よくお話が出ますが、神戸市の長田区はケミカルを中心とした中小企業の町です。そこは地震後の火災で大変な被害

を受けて、町の復興がなかなかうまくいかない。また、中小企業が元どおり仕事、営業が再開できないという状況が続いています。そういう面では、町に活気を取り戻す営業再建が大切だなと思います。しかし、また一面では非常に難しいと思います。

私たちが感じるのは、人のにぎわい、人がたくさん来るということも本当に大事だと。ルミナリエには神戸の人口の2倍ぐらいの方が来られるのです。人がたくさん来たら活気が出るし、町は元気になる。人も元気になる。このことは無条件に大切だと思います。

長田区で映画の寅さんを誘致しようという話が出たのですが、実は撮影してもらうためにはお金が要らしいのです。だけど、あのときは渥美清さんの「行こう」という一声で、そういうものなしで来てくれたという話を聞きました。「長田区の菅原商店街といたら寅さん」というように一体になって、今ではそれが売りになっています。

そういうことはすごく大事だと思いますし、何かそういうことが考えられないのかなという思いで、今年、長谷部まつりへ高校生を連れて来たのです。そういうことでこれからもお力になれたらいいなと思っています。

輪を広げる

三つ目に、アピールすることの大切さです。神戸のときはマスコミの方が取材に来て、一つの避難所でミルクが足りないということが放映されたら、全国から山ほどミルクの缶が届いたり、おしめが足りないといったら、トラックが何台も来たのです。それだけ影響があります。

私は3月に能登半島地震が起こるまでは、穴水という町を全く知りませんでした。穴水という名前も知らなかったのです。でも今、神戸市の職員は穴水の皆さんのことを知っています。マスコミを使うという言葉が悪いですが、アピールをすること、知ってもらうということもすごく大切だと思っています。

私たちは、被災地の交流の輪を広めることもすごく大切だと思っています。5月に幼稚園の皆さんに神戸のお菓子を届けたら、真名井幼稚園の子どもたちが絵を描いてくれたのです。「神戸市の職員労働組合の皆さんと北野工場のテナント会の皆さん、ありがとう」と。その絵は神戸市の副市長の部屋の正面に置いてあります。いろいろな方が副市長のところに来られて、その絵を見ると必ず「これ何？」と聞きます。そうしたら、副市長は必ず穴水の話をするのです。そういう面での絆は今後も大切にしていきたいと思っています。

今後、私たち神戸市職員労働組合と穴水町の職員互助会の皆さんとで助け合い協定を結び、もし何かあったらお互いに助け合おうと。多分全国で初めてだと思いますが、年明けには結びたいと思っています。私たちはそういうものを全国に広げていきたいと思っています。被災地同士のネットワーク、つながりを深めていって、被災地だけでなく、その周りのたくさんの皆さんも、一緒に輪を広げていく場を作っていきたいと思っています。

意見交換会

コーディネーター

浅野 秀重（金沢大学 大学教育開放センター教授）

岡崎 善二（穴水町 企画情報課 課長補佐）

（浅野） 北浦先生、商店街の吉村さん、神戸市の鹿田さんから話題提供をしていただきました。私からも簡単に話題提供をさせていただきます。12月に千葉県浦安市でありました公民館学会で、私は能登半島地震と公民館活動という内容で報告させていただきました。これは同志社大学の先生の研究ですが、阪神大震災後、地域の方々に意識調査をしたところ、最初は「住まい」が重要な関心事だったけれども、5年、10年と調査した結果、



「つながり」が重要な要素として出てきたそうです。「つながり」、これは人と人、商店街と地元の方、行政と市民の皆さんとのつながりと理解できるのかなど。そんなことを話してきました。

また、穴水高校が能登半島地震から学ぶものとして冊子を作りました。その中で、高校生は率直に自分たちのことを述べています。「人の温かみについて知ることができた」「人とのつながり」「人は助け合いながら生きている」「地域の結束力」「人の温かみ」「普段の生活が当たり前であることの大切さを知った」「水の大切さも知った」「震災は他人事ではないということを学習した」。絆やつながりが大事だということを、彼ら若い世代も学んでいます。

穴水町の計画の中にもありますように、これは復旧ではない。3月25日以前に戻るのではなく、創造的復興を目指すのだと。だから、創造的復興を目指す一つの機会として、今日のタウンミーティングを進めていくことができればいいかなと思っています。

（岡崎） 私たち穴水町は3月25日の能登半島地震で、穴水町全町にわたり被災しました。この会場の穴水商工会がある川島地区、駅前の大町地区の被害が非常に大きく、空き地が大変目立っています。倒壊した家を整理し、これから再建というところです。

そういうことで、これからは単なる復興ではなく、新しい穴水町のまちづくりに向け、今日は皆さんの忌憚のないご意見やアドバイスをいただければと思っています。

そこで、震災が一段落した6月初めから、ここを会場にして「ふれあいサロン」を設置し、商店街の人や町の方々が集まり、これからのまちづくりをどうしようかということ話し合ってきました。最初にその参加者の方からお話を伺いたいと思います。

（加藤） 私はここから50メートルぐらい離れたところで靴屋を営んでいます。みんなで集まり、知恵を出し合って考えようということで、金曜日の夜にこの場所に集まって議論していま

した。

最初は軽い気持ちで、自分たちが抱えている問題点など、体の中にあるものは出してしまうという形で出しました。商店街、中心市街地、観光のことなど、いろいろな意見がたくさん出てきました。少しずつまとめの作業に入って、11月3日に役場のホールで発表しました。発表する段階でもなかったのですが、何かやったという証を示したくて、発表会という形をとりました。



議論の中で一つ感じたのは、まちづくりという大上段に構えた話になると、とらえどころがないのです。商店街の問題と中心市街地の問題は別の形で論じなければならないとか、観光と商店街はそんなに簡単に結びつくものではないと。もちろん穴水は川がたくさん流れている独特な風情を持った場所なので、川をどう生かすという点でリンクするよう議論されてきましたが、あまりに問題点が多く、さあどうするかというところが現時点です。

また、どのようにして実のあるものにしていくかという中に、組織化という問題があります。みんなで集まってまちづくりということを議論したことがなかったので、遅々として進まないということがあり、この辺の組織化の問題のポイントをアドバイスしていただけたらと思っています。

（岡崎） 意見はいろいろ出るけれども、まちづくりを含めて、みんなでやるときにうまく組織化できる方法はないかということですね。会社でも、組織で動くということはなかなか難しいことですが、浅野先生、その辺でアドバイスがいただけるでしょうか。

（浅野） 私はスーパーマンではないので、オールマイティに答えることは困難です。この質問にお応えいただける先生方、順番に挙手をお願いします。

（宇野） 金沢大学の宇野です。専門は地域連携コーディネーターで、大学と地域の皆さんを結ぶ役目をしています。能登の珠洲、輪島、穴水もそうですが、行ったり来たりしながら行政の皆さんと手を携えてやっています。

今の組織化の話ですが、その前に、11月3日に震災復興記念シンポジウムが開かれました。そのときに穴水町商店街の復興のための行動計画が発表されたということですが、その中の具体的なポイントはどんなことでしょうか。その中には、組織化等の話はありましたか。



（加藤） 発表はしたものの、住民に行き渡らない面もあります。復興サロンの世話役の5、6人でメンバーは「この指とまれ」方式で集めようと確認しあったのですが、細かい、戦略的なところはまだ詰めていません。

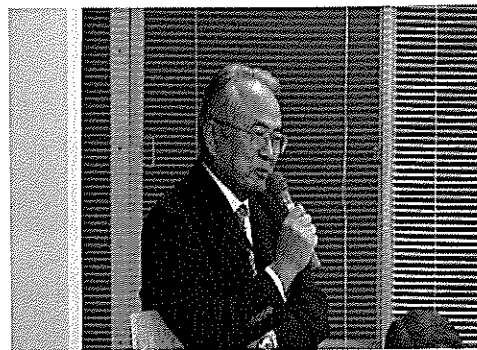
（宇野） 7月13日に、穴水町を含む奥能登二市二町と金沢大学と県立大学が、地域に課題があればそれに関して大学も協力しますという地域づくり連携協定を結んだのです。石川町長と

林学長がサインをしています。住民の皆さんで呼びかけをして、住民組織、実行委員会を作りますということ盛り上げていただければ、金沢大学が行動メンバー、あるいはオブザーバーとして加わることができます。一緒にプログラムを考えませんか。そうすれば具体的な話として私も動けます。

(岡崎) 宇野先生から、地域づくり連携協定を金沢大学と町が結んでいるので、ぜひ一緒にやりませんかというご提案でした。金沢大学の頭脳を活用して穴水町の活性化に努めていただければと思います。

(吉國) 金沢大学の吉國です。私は大学に籍を置いていますが、学者ではないので、座長等の話があれば幾らでもお引き受けします。

(平野) 金沢大学の平野と申します。理論的に組織化するのは大変難しい。まず、できないと思います。やりたいことは大体絞られているようですが、そういうことについて、確かどこかで同じようなことをやっているはずで



例えばカヌーで町の川を回遊して、一つのアトラクションにしていこうということは、テキサスでもイタリアでもやっています。そういうところを知っている人にまず話を聞いて、自分の町とどれぐらい共通点があるのか、自分の町のバージョンはどういうことでいけるだろうか。そういうことをいろいろ議論していかないと、誰かにどうしたらいいかを教えてくれというのは非常に難しい話だと思います。他人の知恵を盗んで、自分なりに考えていって完成させていくというのが古今東西、今までやられてきたことではないかと思っています。

(岡崎) どうもありがとうございました。また参考にさせていただければと思います。

先ほど神戸市の鹿田さんから、神戸市は13年前の震災のときに100万人ともいわれるボランティアの方々が参加されて、大変感謝しているというお話がありました。穴水町にもボランティアの協議会有り、震災の折にはボランティアセンターに詰めて活動された松田さんから、ボランティア関係のことについてご発言いただけますか。

(松田) 震災当日、私はちょうど高齢者のグラウンドゴルフに参加していました。異常な揺れを感じ、すぐに中止して家に帰ったところ、家は一部損壊で、町並みも非常に崩れていました。

私は穴水町ボランティア協議会の会長職を預かっている関係上、これからどうすればいいかということで、事務局のある社会福祉協議会へ出向きました。関係者の皆さんも被害を受けていますので、召集も非常に苦労しましたが、それぞれに責任を感じて、地域災害対策本部を立ち上げました。情報や救援のかなめになるところを作らなければいけないと。幸いなことに地域の方々がそれぞれ落ち着くと同時に駆けつけて下さり、非常に助かりました。高校生をはじめとして若年層の方、老人会その他それぞれに駆けつけていただき、非常に良かったと思いま

す。

翌日には、専門的なレスキューストックヤードの方々が駆けつけてくれて、こういう場合にはこうすればいいということを指導していただきました。また行政にも情報提供や協力をしていただき、どうにかこうにか対策本部を立ち上げ、それなりに活動できたと思っています。地域の方が結束して助けて下さったわけです。そういうものが皆さんの地域にそれぞれ広がったと考えています。

そういうことで先生方には、ソフト面での今後の支援の仕方をお聞きしながら勉強し、できるだけのボランティア活動を継続していきたいと考えています。

(浅野) ボランティアというものは、型にはまったものをするというよりは、自分ができることにかかわっていく、自分ができないことは誰かができる。だから、自分ができることにかかわっていくということだと思います。その部分をやってくれたら、僕たち、私たちはこの部分をやれるというような形で、それぞれが持っている持ち味を出していくということが大事なのでしょう。

(松田) 新潟中越沖地震の災害に遭われて、仮設住宅に入っている方のところにも行ってきました。お互いに連携を取り合って助け合う。それぞれが体験しているわけですから、そのことが参考にもなるし、ボランティアは一方的に受けるものではなく、必ず返さなければいけないということを皆さん認識していただいて、今のところはうまくいっています。もしお知恵があったら、お借りしてやっていきたいと思っています。

(浅野) いつも受ける側から、時には与える側になる。そういうことを通して、他人事を自分事として受け止めることになるのかなという気がします。

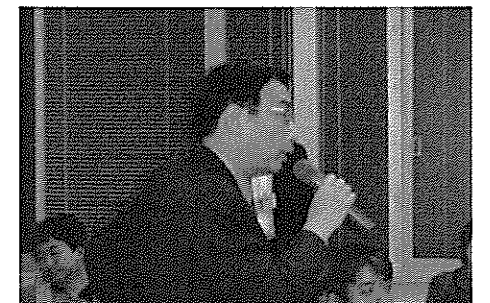
(吉國) まちづくりというテーマで、皆さんがどうお考えになっているのかということをお聞きしたいです。私の父親の出が能都町(昔の神野村)で、おばも藤波にいますので、人ごとではないのです。

私は大学にはいるのですが、先生方のネットワーク、外の企業のネットワークを作りながらいろいろなことをプロデュースするという仕事をさせていただいています。そういった仕事で一番大事なことは、どういうものを作り上げるかというゴールイメージです。

どんな町を作るのか。昔の自分たちが育った町をそのまま作るのか。大きな問題を抱えている能登を根本的に変えるようなまちづくりを考えるのか。そういうことで多分違ってくるのではないかと思います。

先ほど靴屋の若旦那さんのお話を伺って、神戸と穴水は根本的に違うのではないかと思います。神戸は放っておいても栄える町だと。能登は構造的な問題を抱えている中で、地震があった。これをどうとらえるのかということで、まちづくりが根本的に違うのではないのでしょうか。

(吉村) 商店振興会の会長としてご返事しなければいけないかと思います。穴水町は昭和23

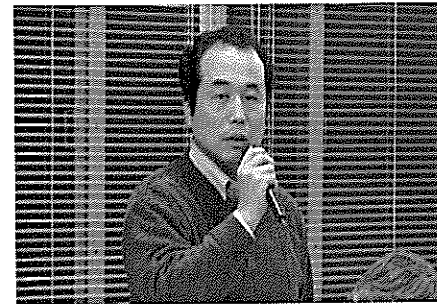


年くらいから約10年間は1万9600人の町でした。そのころは門前町と合併して市になるというような話でしたが、いつの間にか1万500人という状況になってしまいました。

その中でも、輪島線がなくなり、能登線がなくなりということで、人の行動範囲が狭くなってしまった。特に年寄りの行動範囲が非常に狭くなった。このようなことで、町の中を通る人も当然少なくなる。そこに穴水駅があるのですが、病院へ行くときには駅を降りて歩いて病院に行ったものですが、バスが病院の前に止まってしまうので、町の中にはよほど用事がないと入ってこない。そういう必要がなくなったという状況です。

穴水町は能登の玄関口といわれて久しいのですが、残念ながら、玄関がどこにあったのか分からない、奥座敷の方がずっと良くなってしまったという状況です。穴水町には産業がありませんし、どうしても小さい地域としか考えられないような状況なのです。今言われたように、能登一円となって物事を考えれば、もっと飛躍していけるのではないかと思います。

(七海) 復興サロンのメンバーで、商店街のメンバーでもある七海と申します。どのようなまちづくりを目指すかということですが、吉國先生がおっしゃったように、神戸市と穴水町では基礎の部分がだいぶ違います。神戸は大変な目に遭われましたが、マンパワーもマネーもあります。穴水町は、財政的な基盤が非常に脆弱です。何よりも過疎化、少子高齢化の波に押されてこの先も不安です。



その中で、この地震からどう立ち上がっていくのか。マンパワーもお金もない中でやっていくためには、穴水ならではの独自性というか、そのようなまちづくりが必要なのかなど。この町に住んでいるわれわれにとって必要なものがあり、外から見て「穴水は面白そうなところだね。ほかとは違う良いところがあるよね」ということを強く強調して打ち出した形のまちづくりをしていかなければいけないと思っています。

新しいものを作るといっても、今持っているものの中でほかに比べて何か秀でているものはないかということを探していかなければいけない。その中で川の川であり、穴水の歴史の中で築かれてきた文化物なのかなと思っています。ここの商店街通りの整備もしますが、逆の発想をすると、普段から車がそれほど通らないので、車が通らない商店街という作り方があるのかもしれない。

過疎化の中で活性化するためにはどうしたらいいか。そのために各地の先進事例を教えてください。その中からわれわれの生きる道はこれだというものを探り、何とか差別化されたまちづくりをしたいと思っています。そのヒントをぜひ皆さんに教えていただきたいと思います。

(坂下) 地震が起きる前の穴水町の商店街を少し考えますと、穴水町には商店街があり、農村部があり、共存共栄で成り立っていましたが、ご多聞に漏れず、穴水も郊外に大型店舗が出てきて、商店街はだんだん寂れていく傾向にあったわけですね。

そういう中で、震災復興をどうするかということを考えないといけない。穴水町の商店街と農村部は共存共栄でうまくいっていたのだ、だから元に戻ればそれでいいということではありません。穴水町が地盤沈下を起こしてどうなるか、商店街も成り立たないようになるのではな

いかという中で地震が起きたのですが、私たちは、災いを転じて福となすというようなところへ持っていきたいと思います。

先般も、この場所で町政懇談会がありました。そのときに、町のマスタープランで、シンボル道路や道路の拡幅、震災の被害が大きかったところの区画整備をやるという町の基本的な計画が示されました。私はそのときに、それができても商店街の皆さんは、お客さんの見通しがないのに融資を受けて店を拡張するという決断はなかなかできないのではないかと。だから、公共と民間が力を合わせて、この被災地にお客さんを集めるようなことを検討していただければと提案しました。

地震が起きる前に商店街がうまくいっていたわけではないのです。むしろ商店街は止まっている傾向が強かった。その中で、穴水の復興、復興をどうするかということをご議論していただきたい。

(中村浩二) 金沢大学の中村です。私は昆虫の研究をしています。今日お邪魔しているのは、一つは「里山里海自然学校」を奥能登の四つの自治体と連携してやっています。当然、穴水町とも一緒にやっています。それから、角間の「里山自然学校」もずいぶん前からやっています。また、「能登里山マイスター養成講座」で、環境に優しい農業、林業をすることによって、価値の高い米や商品を作るということもやっています。受講生には穴水町の役所の方や輪島市や県の方もいます。



先ほど穴水町の商店街の話がありましたが、奥能登の四つの自治体どこでも人口が減っており、一般の店は本当に寂れていると思います。

まちづくりをどうするかということで、知恵がないかということですが、穴水全体、あるいは奥能登全体で考えますと、里山があったり、農業、林業があって、そこに伝統的な商店街があったりしてうまくやっていたわけですね。それで非常に苦しいところに来ているのですが、穴水で今できること、プラスのことは何かというと、やはり自然だという話が出ています。

例えばきれいな川がありますし、カキができるきれいな海があるわけですね。先日、私はトキが最後までいた乙ヶ崎へ案内していただきました。そこはきれいな入り江で、ひょっとしたら今でもトキがいるのではないかと思います。穴水だけでなく奥能登全体にはものすごく優れた自然があります。しかし、優れた自然があるということだけを言われてもどうにもならない。皆さんが穴水の優れた自然についてどれだけ知っておられるかというと、あまりご存じではないのではないかと思います。

例えば穴水の川にどのぐらいいろいろな珍しい生物がいるか。それは昔と一緒なのか。トキがいたころと同じぐらい生物がいるのか。穴水の海岸はよそと比べてどのぐらい水がきれいで、穴水のカキは本当にどれぐらい栄養があるのか、きれいな水だからどれだけいいのか。

そのように自然が優れているということを自分たちでもっと確認したり、調べたりすることは、難しいことはないのです。高校生や中学生、小学生と一緒にやってもいいのです。自然のどこが本当に良くて、どこが特に自慢できるかということを探るということであれば、私たちは自然学校などいろいろやっていますし、大学にスタッフもおります。トキなどの鳥類について詳しい者もいますので、お手伝いできます。里山里海の健康診断ということで、身の回り

の田んぼ、海や川にどれだけ生物がいるかということ調べてたりもしています。そういうお手伝いができると思います。

(岡崎) 中村先生、ありがとうございました。自然の良さにもっと注目してほしい。そういうものを生かすことならお手伝いできるということですね。

(森本) 穴水町には観光名所がないので、観光客があまり来ないのです。今度、商店街の町並みが新しく生まれ変わるということで、素晴らしい商店街ができるのではないかと期待しています。そこで、町並みの観察というような名目で、まちづくりを見に行こうという動きが日本全国どここの町村にもあると思いますが、そういうものを利用することで、年間何万人も呼び込むことができるのではないかと甘い考えも持っています。

穴水町は川の町で、今までは川底に泥がたくさんたまっており、船も通れないし、川の水もうまく循環していない。昔は泳いだりもしたそうですが、現在はどぶ臭い川です。この地震で川の工事をするということになりますと、美しい水が流れるということで、お祭りのときや季節に合わせて川に花いかだなどを浮かべて、町を活気付けたらすばいではないかと思えます。

穴水町の岩車には、廃品回収したガラスを溶かして石に変え、その石が汚いヘドロを吸い取って分解するという工場があります。その石も、川底に沈む石と川の上に浮かぶ石の両方があるのですが、そういうものを利用して、花いかだの下に工夫して、きれいな水がいつまでも続くように、そういう観光の方にも少し目をやってみればいいのかとも思えます。

また、今度の地震では津波もありませんでしたし、川の水が増えたということもなく良かったです。私たちが町の役場や消防は川沿いにあります。そこにすごい津波が来たら、司令塔でもある役場や消防が孤立してしまうという立地条件にあるのですが、これはどう思われるでしょうか。

(宇野) 川をきれいにするという事は、川の上流をきれいにすることなのです。20年ほど前から畠山さんという人が「森は海の恋人」といって、海をきれいにしたかったら森をきれいにしようという運動をしています。海がきれいになれば、とてもおいしいカキが取れるのです。

そのあたりの海と川と森を一体化した協議会を立ち上げる。これは男衆は駄目で、女衆が動かないと駄目です。結局、あちこちで森づくり、川づくり、海づくりをやっているのは漁協や農協の婦人部の人たちです。漁協の人が山に入って木を植えているのです。そんな取り組みを子どもたちと一緒にやっていく。

それでいいアドバイスをいただける人を呼んでほしいということになれば、金沢大学で呼びます。今度、それを提唱している人が3月21、22日にいらっしやって講演をされますので、よろしければぜひとも参加してください。岡崎さんにその資料をお渡ししておきますので、ぜひとも来てください。

「森は海の恋人」というような運動を少しずつ始める。そうすると、川もきれいになります。ということは、商店街もきれいになるということです。そのような地道な取り組みもあります。

(浅野) 例えば徳島の取り組みがあります。子どもたちが絵を描くたびに川を真っ黒に描い

ている。それを何とかするために、毎月2回ずつボートで網を引いて、まずヘドロを除去したと。とにかく水に親しめる空間を作ろうという取り組みをしていって、雅楽やジャズのコンサートをやりました。また、地域の企業や自治体から寄付をもらい、環境に関するものを5000人の子どもたちにプレゼントした「川からサンタがやってきた」というイベントを開催した例もあります。

また、宇野さんが言われたことと同じように、源流の村のエリアを1000年借り受けて、源をきれいにすることによって、それが川と海とつながっているというような、スケールの大きな取り組みとして、徳島の吉野川の例があります。そのようなノウハウを持っている先生が3月にいらっしやるということですので、そういう情報を活用していただければと思います。

また、川は心の浄化作用も持っているということで、ウォーキング等で川べりを歩くことで患者さんの癒しにつながっているという病院の取り組みの例もあります。

(北浦) 先ほど津波のことをご質問されましたが、昭和39年の新潟地震と昭和58年の日本海中部地震で、日本海に津波が発生しました。それは七尾港にも来ましたが、輪島、舳倉島にも来ました。穴水のところはリアス式海岸で、下手をすると津波が大きくなる可能性があるのですが、幸いそのときには大きな津波被害はなかったのです。

富山湾の中で地震が発生すれば、ひょっとすると穴水湾に津波が来るかもしれません。しかし、有史以来富山県内に被害をもたらした地震を調べた結果、一つの地震を除いて全て陸地で発生した地震でありました。したがってこれらの地震による津波は発生していません。除いた一つの地震は863年に発生した地震ですが、富山湾で発生したのか、陸地で発生したのかが不明であり、津波が発生したかどうか分かりません。したがって最近の1000年くらいの間に富山湾で地震は発生していないし、津波も発生していないとはいえますが、将来も津波が穴水を襲わないとはいえないと思います。

(神谷) 金沢大学の神谷です。まちづくりが専門と書いてありますが、地域の雇用が専門です。そうすると、約1万人の人口をどれくらい維持していくかというのが、これからのまちづくりになるかと思えます。そう考えたときに、若い人が一体どのように穴水で飯を食っていくか。20年後に穴水に住んでいる方が何で飯を食っていくといいか、その算段をどうしていったらいいかということが一番重要になってくると思います。

穴水はグリーンツーリズムなどの試みもだいぶ前からやっておられました。それから「まいもんまつり」など、食べ物で売り出されていましたが、商店などはどれくらい効果があつて、どれくらいの雇用が生み出されたか。客観的に、冷静に判断して、どういう部分がマイナスで、どういう部分がプラスであったかをもう少し検討する必要もあるのではないのでしょうか。

ほかの条件として、和倉という、割と全国区の観光地や能登空港が近くにありまので、そういう有利な条件をどう生かしていくのかということも、今後考えていくときに非常に重要です。

過去、人口が2万人のときには、鉄道が結節点、中心ということで、周辺からの買い物客をある程度集めてきたという側面もあるかと思いますが、これからは、そういう周辺部から商店街に客を引き込むのは難しそうだし、周辺人口もどんどん減っており、高齢化も進んでいる。

そのときに、起爆剤、刺激として、観光産業、サービス業がプラスアルファの上乗せとしてあるのではないかと思います。その点で、これまでのグリーンツーリズムや「まいもんまつり」

で、どれくらいの効果があったかを教えていただければありがたいのですが。

(岡崎) 「まいもんまつり」というのは、四季折々の能登の旬の味覚を提供することを目的とするもので、金沢の方もよくご存じなのは「かきまつり」ですね。「かきまつり」は1月からですが、20年近くやっていますので、12月から、金沢や富山の方から「カキを食べられるのですか」という問い合わせがあります。12月から3月の間で約10万人のお客さんに来ていただいています。

(佐川) 金沢大学の佐川と申します。地域スポーツの振興にかかわるような仕事をしています。例えば地域スポーツでにぎやかになったところ、うまくいったところは大きな危機感を持って、その危機感を何とかしようと思って取り組んだ成果が、結果として成功につながったという例がたくさんあります。そういう意味では、皆さんが感じておられる危機感は大きな力になるのではないかと考えています。その一つの証拠に、おそらく地震の前よりもお互いが自分たちの町のことについて意見交換をする機会が確実に増えたのではないのでしょうか。普段話さない人とも意見交換をするような機会ができた、そのことをまず確認されればいいのではないかと思います。

今までの話を聞いていますと、川を中心にどのように町を元気にするかということは合意できたことなのではないかと思います。それから、絆とかつながりを川を通じてどのようにすればよいのだろうかということを皆さんでさらに考えていけば、そこから組織化が進んでいくのではないかと思います。

大事なことは、誰かが独り勝ちしようと思って頑張ることではなく、みんなが協力して、それぞれの持ち場で何ができるかを考えることが大事ではないかと思います。そういう意味で、川をめぐるって、高校生は何ができます、この町会なら何ができますというような、川をテーマにしたさまざまな取り組みを、それぞれの地域や組織など、いろいろなところで取り組まれたらどうでしょうか。

そういう取り組みについて、どこかの誰かが川をめぐる取り組みをしたときには、そのことをしっかり評価することが大事なのではないかと思います。「川をめぐる取り組み、元気が出るような取り組みは大変いいね、もっとやろうね」というようなことを、お互いに合い言葉のように評価し合うことができれば、それが町を元気をやる、町を挙げての取り組みになるのではないかと感じています。

商店街の皆さんがそういう動きのリーダーシップを取っていくことで、結果として、町全体が独り勝ちでないような、大型店が持っていくようなものでない、にぎわいや話題の豊かさのようなものができるのではないかと感じました。

(川畠) 金沢大学の川畠です。私の専門は農業経済や農村社会で、ずっと農村調査をしており、能登の農村も随分歩かせてもらっています。そういうことを前提に、先ほどからの議論を聞いていて感じたことを三つぐらいに要約したいと思います。

一つは、皆さんの地域に対する目の向け方が地震を契機にかなり変わり始めているのだなと感じました。



私は前に県に務めていたことがあるのですが、県庁の連中で能登へ赴任するときが一番行きたいところはどこかというところ、穴水なのです。なぜかというところ、町がそれなりの規模であることと、自然景観とか、食べ物がうまい、人情味があるとか、物価が安いということも挙げられました。穴水はそういう良さを持っていた町ですし、今もそうだと思います。そのころの穴水をぜひ思い起こしながら、穴水の良さ、自然を含めての棚卸しをする。まだ出ていないと思ったことを単語でいうと、ボラ、イサザ、たたら、ブドウ、バイオマス利用など。穴水全体の良さを考えるときに、いろいろな視点を切り口にもう一度きちんと議論するような機会をできるだけ多く作ってもらいたい。これが大事ではないか。

二つ目は、復興の方向としては、こういう方向で頑張ろうという青写真ができつつあるように感じました。問題は、それに魂を吹き込む。しかも、全国に対してどんなPRをしていくか。この二つを積極的に考える必要があるような気がします。

能登の人たちはPRの仕方があまり上手ではないと思います。ここで海や川をテーマにやるとしたら、幾つか考えることがあるなと思っています。やや思いつきですが、中村教授と一緒にドイツを旅したときに、ライン川の上流のある町が川をテーマにしたまちづくりをやっていたのです。そこは船着き場のようところで、周辺から切り出す木を川に流す中継点のような町だったのです。そんなところと姉妹提携を結ぶと、町のイメージアップにもものすごくつながるような気がします。

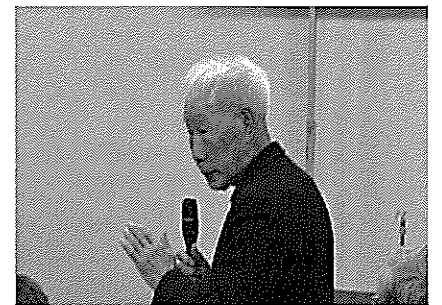
また、例えばカヤックは既にやっていますが、それをいろいろな形で取り上げていくとか、いろいろな方法があります。町長はそういうことがうまいと思うので、そういうことを仕掛けに使っていく。そういうアイデアや議論をしていく必要があるのではないかと。

また、先ほど組織づくりの話が出ました。今、サロンで皆さん自由にいろいろな意見を交換されていると。中心になる方がいろいろな考えを持って、素晴らしいと思って聞いたのですが、単なるサロンで終わらせないために次のステップに踏み出そうと一生懸命になっておられるのがよく伝わってきました。一生懸命になるときに何をしたらいいか。まちなかの人たちだけで組織を作るということだけでなく、周辺の村の人たちと連携するようなことももう少し考えてみられたらどうかなと思います。周辺を見ると、まちなかとなぐブドウなどの食材など、いろいろなものがあるのではないかと感じています。

最終的に、そのサロンからグループ別の議論をする場合、さらにそれを具体的な組織として立ち上げていく。川をテーマにすると、幾つか切り口があると思いますが、そういう議論を持ち寄るような、次のステップを踏み出す努力が求められているような気がします。

(坂下) 私たちは自分たちの足元にある光るものを見落として、よその町のことをばかりをうらやましがっているという傾向がありまして、ご指摘にあったとおりでと思います。

その中で、冥王星の存在を予測したパーシバル・ローエルが穴水町に来ていたと。そういうことで、私はローエル祭を始めました。そのことによって日本ローエル協会ができ、東大の小尾信彌先生が会長になって、穴水で、4泊5日の研修会も開いていただいた。穴水はそういうこともやっているということ、先生方にお聞きいただきかったです。



(浅野) 何が課題か、足元にある大事なものは何か。これを象徴的に、その地域にある変わらないものとしての「土」。それに対して何とかしないといけない震災復興後、この町をどうするかという熱。皆さんは燃えるような「火」を持っている。なおかつ皆さんは、あのときにはこうしたという「手」を持っている。それは手段です。そのような地域における「火」や「土」、
「手」に当たるものを活用しながら活性化を図っていく。

足元を見るとおっしゃったように、地域には何があるか。川がある、山がある、神社仏閣がある。産物は何だというようなことで発信していくようなこと。これまでも取り組んでこられたのですが、さらにまたその辺に取り組んでいく。そこに新しい風が吹く。今日、このタウンミーティングが穴水町で開かれたのも、一つの風おこしになっているのではないかという気がします。

そういう意味でも、金沢大学はいろいろな力になれる体制でおりますので、利用していただければと思っています。「おらが町をおらで作っていく」という形でいければと私自身も思っています。それが穴水町の復興計画の中の一つ、コミュニティとのかかわりです。震災直後に経験した、日ごろからの地域コミュニティの大切さ、住民の連帯感、自治意識を理解し、相互に支え合うという精神と、より良い地域づくりへの関心を高めるためにコミュニティ活動の活性化を図ろう。それぞれの持ち場、持ち場でしっかり考える。その考えるということが、自分たちの使命を果たすことになるのではないかという気がしています。

挨拶

中西 孝（金沢大学 社会貢献室長）

長時間にわたり、本当に熱心な議論になりました。本当にありがとうございます。先ほど吉村さんから広報誌「あなみず」を頂きました。ここに未来像が書いてあり、皆さんがきれいな町を計画されておられることが分かりました。まちづくりというものは短時間ではできないのですが、この町で生まれ育った人たちが一番真剣にこの町のことを考えてくれる人だと思います。これからこの町で生まれ育った若い人たちの知恵とエネルギーを、何とかこういう夢のあるまちづくりに充てていけたらと思いながら、イメージ図を見ていました。

人材というものはとても大事だと思います。この町で生まれ育った人たちをこの町から逃がさないようにするためにはどうすればいいのか、今すぐに答えは出てこないのですが、そのところも考えていくことが大事なかなと感じています。

また、ローエルは穴水の看板の一つではないかと思います。金沢大学には天体物理、宇宙物理を研究されている先生がおられますので、そういう先生と穴水町が連携して何かやっていくということも考えられたらいいのではないかと思います。

もう一つ、先ほど川をきれいにというお話があったのですが、これも金沢大学に対応できる先生がおられるので、帰って話をしてみます。今、七尾市の御祓川という全国一汚い川も少しずつ良くなってきているということなので、そういう経験のある方もおられます。また、きれいになったという事例ができれば人が見に来るのです。そういうモデル事業をやるということは、全国から注目されることになるかと思っています。

今日は震災を機会に、みんなで知恵を出し合って、穴水の良さ、人と人とのつながりの大切さを再確認してまちづくりをやろうという意識を持っておられるということを、ひしひしと感じました。ご意見等もたくさん出していただきましたが、やはり時間が足りません。もう一度穴水でタウンミーティングをやりたいと、先ほどから意見交換を聞きながら思いました。ぜひまた穴水でタウンミーティングを開きたいということを申し上げまして、本日の終わりの挨拶とさせていただきます。今日は本当にありがとうございました。



資料 1

日 程

開 催 地 域	穴水町
日 時	平成19年12月4日（火）18：30～21：00
会 場	穴水町 商工会 研修室
主 催	金沢大学
共 催	穴水町、穴水町教育委員会
大 学 側 参 加 者	中西，由良，中村（浩），佐川，川畠，宇野，中村（晃）， 小路，濱，山本， 綱田，（以上社会貢献室） 浅野（大学教育開放センター），北浦（工学部）， 神谷（文学部），吉國（共同研究センター）， 平野（共同研究 センター） 計16名

プ ロ グ ラ ム

テーマ：「震災復興から始まるまちづくり」

プログラム（18：30～21：00）		
18:30～18:35	挨拶	中西 孝 （金沢大学 社会貢献室長）
18:35～18:40	挨拶	石川 宣雄 （穴水町長）
18:40～18:55	話題提供	北浦 勝 （金沢大学 教授）
18:55～19:10	話題提供	吉村 扶佐司 （商店街振興会長）
19:10～19:25	話題提供	鹿田 嘉博 （神戸市職員労働組合副執行委員長）
19:25～19:30	休 憩	
19:30～20:50	意見交換会	コーディネーター 浅野 秀重 （金沢大学 教授） 岡崎 善二 （穴水町 企画情報課 課長補佐）
20:50～21:00	挨拶	中西 孝 （金沢大学 社会貢献室長）

資料 2：アンケート結果

■タウンミーティングの内容、運営などについて

- ・ 先進地の例を調査し、自分の町に生かせるものは生かして当てはめていくことが大切であるということがわかった。
- ・ もっと現実的な内容を聞きたかった。
勇気を出して意見を言いたかったが、できませんでした。
（以前アンケートで老人の通院のついででの商店街利用が多かった。このことをもっと現実的に考えていかなければならないと思います。）
- ・ 質問も答えもテーマを絞って進行してほしかった。
終了近くになって、いい意見を聞くのではなく、穴水の状況や問題点を町から大学の先生方に知らせておいたほうがよいと思う。また、町民からの質問もテーマを絞って行うように進行すべきだと思う。
- ・ 自分たちで話し合ってきて、いろいろなアイディアや意見を出してきました。それを実行に移す際、課題が多く動けなくなりそうなきががあります。そんな時には先生方が知恵をお貸しいただけるとのことなので、今後も連携できたらと思います。ありがとうございました。
- ・ 実行する熱意が必要。利用できるお話があった。
- ・ タウンミーティングの内容からすれば防災の3本柱である未然防止、拡大防止という視点で考えるとき、地震、津波、水害、地すべりなども直近の問題として、ハザードマップが石川県の市町で十分対応できる状況にあるのか知りたい。隣県の富山県は災害の先進県としてかなり安全、安心に関心を持っている。
- ・ 地元の大学だなあとと思った。この間は珠洲に来られて、また穴水に来ていただきありがとうございます。今後地元で大いに大学が息づいてもらいたいですね。
- ・ 時間が少なく、具体的な話までできなかった。
もっと根本的な話をしてほしかった。これからも続けてほしい。
- ・ 大変よかったと思います。
- ・ 非常に参考になった。このような機会を多くもってほしい。
- ・ テーマを絞った形にしてほしい。
- ・ 神戸市職員労働組合の方の話題提供のお話がよかったと思います。ぜひ参考にしたいなあと思いました。
- ・ 北浦教授の説明がわかりやすくよかったし、参考になりました。災害後の神戸に行きましたが、神戸の労働組合の話題提供を聞き、長田町の商店街が苦勞しているとのこと。どこも大変だと感じました。
今回のミーティング、大変よかったと思います。
- ・ 神戸市職員労働組合の鹿田さんのお話に感動した。
- ・ 神戸の話をもっと聞きたかったです。
- ・ 市、町レベルの分科会と、能登地域の全大会の両方とも大切だと思います。大学から多くの方々がせっかくいらして頂いたのもっと深く話し合える時間があるとよいと思います。能登から金沢までは遠いので金沢大学が何をしているのかを能登の人に知らせ

るためにも是非能登へ来ていただきたい。

- ・ 時間のない中、大変効率的にポイントを絞って有意義な話し合いを行うことができたと思う。次回への期待が大きく膨らんだ時間であった。本当にありがとうございました。

■金沢大学への意見・提案など

- ・ カキ貝の殻の再利用、道路の舗装とか、川の浄化、震災の不要瓦の再生などについても議論してほしかった。
- ・ 穴水をよろしくお願いします。
- ・ お互いに的を絞って意見をお聞きできる機会が持てればありがたいと思います。
- ・ これからも交流を深めたい。
- ・ 「弱者を大切にする地域＝住みよい地域＝発展する地域」になると思う。
- ・ 金沢大学だからできることがたくさんあると思います。
- ・ 学問の立場から「高齢者に優しい商店街づくり」「ソフト面のボランティア活動」について教えてほしい。
- ・ 観光名所のない穴水ですが、今後新しく商店街の町並みができるので町並みの観察をして年間何万人の人を呼び込める科などを観察するのもよいかも。川の町、穴水と言われているが、川の工事も始まります。花イカダを浮かべ、町の活気をつけるのもよいかも知れません。マスコミを利用してPRを考えてみます。
金沢大学の皆様には真剣に考えていただきましたことに感謝しております。
- ・ 北浦先生、そのほかの14人の先生、詳しく説明してくれたので私たち主婦でもわかりやすく聞けました。
- ・ 金沢大学に能登出身の人材がいるように、能登に金沢大学出身の人材がいると思います。その人材の活用を図ってほしい。
まちづくり、地域おこし、ふるさと教育に重要性が問われる中、そのコーディネートを行う人材の育成を大学として行ってほしい。(社会教育主事、学芸員等社会教育専門職の研修やリカレントなど)
- ・ 今回のようなタウンミーティングをこれからもどんどんやってほしい。